

アメリカの満州進出への野望

アメリカの満州進出への野望に話を戻しますが、一九〇九年、ノックス國務長官が次のように宣言しました。「全満州の鉄道の中立化をはかるうではないか」と。つまり南満州鉄道の日米共同経営に失敗したアメリカは、日露戦争に勝利して日本の権益となった南満州鉄道と、その他の東支鉄道を国際鉄道にしようではないか、と言うのです。そしてアメリカは南満州鉄道の周囲に鉄道を敷くことを宣言したのです。

しかし、ポーツマス条約締結後、小村外相は早速清国に行きまして、遼東半島の租借のこと、南満州鉄道の権利およびその周辺の開発の権利について公式に清国の承認を得、さらに満鉄包囲鉄道は引かない、という条約も結んでいるのです。ノックスの宣言は明らかに挑発であります。当時の米英知識人は「満州の鉄道の奪い合い、鉄道をめぐる政争が、日米戦争の始まりである」と言っていますが、結果はそのようになりました。

つまり、米西戦争でアメリカはスペインを敗って、グアム、プエルトリコ、フィリピンを占領し、ハワイを併合し、アジアに手をのばして来ます。しかし、イギリスやフランスに比べると中国進出は出遅れたのです。ですから後から割り込むために、アメリカの大陸政策として、ジョン・ヘイは「門戸開放、機会均等」を唱えたのです。アヘン戦争と三国干渉で、イギリス、フランス、ドイツは九龍を取り、香港を取り、広州湾・青島・遼東を奪い、主な都市に租界を設けて、関税の自主権を獲得し、鉄道や鉱山の採掘権も取る、といったようにアメリカを除く西欧諸国は、すでにシナの各地を奪い合い、いたる所に権益を確保していたのです。残されたのは満州のみですが、その満州にも後から割り込むには、日露戦争に勝利して満州に権益を持った日本が邪魔なのです。

かくして私は、大東亜戦争は日露戦争から始まった、という観方をとっています。

例の『大東亜戦争肯定論』を書いた林房雄氏は、更にさかのぼって、ペリーが黒船で日本にやってきた時から日米戦争は始まったと主張しています。それも一つの観点ですが、私はポーツマス条約が結ばれた時から、日米は相容れない間となり満州という餌を真ん中に置いて、奪い合う仲になったと観ています。